



『讃歌』

長谷川 光一 [愛知県]

太古の昔から多種多様な生命が誕生し進化し、そして絶滅してきた。我々を育ててきた母なる大地は生命の樹と化してすべてを受け入れ融合させる。

たとえ無機物であっても創造主に変わりはない。全てが尊い生命のゆりかご。また次の時代が生まれようとしている。



『人物』

三島 かくえ [長野県]

[贅沢なこと]

コロナ禍でいろいろなことを制限されたのはとても厳しいけれど、その反面、多くの時間を持つことができた。作品完成のタイミングを時間切れで筆を置かざるを得ないことがしばしばあったが、計画していた展覧会などの中止で気持ちの整理ができ、ゆとりを持つことができた。改めて、絵を楽しんで描きたいと強く思った。今の自分が持っている美意識(直感や感性)に自信をもって、素直に表現していこう。背伸びする必要はないよと、自分に言い聞かせて。

何気ない日常の生活の中に豊かで贅沢なシーンがある。そこに安らぎが感じられる絵を描きたい。



『静物』

水谷 武 [愛知県]

[私の作品について]

創造力の源泉はどこにあるのだろうか。創造性に関する事は右脳で、論理的な事は左脳で処理されると言われてきた。単純に言えば、アートは右脳だと信じられて来た。しかし、最近の研究で、かつて考えられていたほど右脳と左脳の機能が明瞭に区別されるのではない事が解って来たという。

創造的な作品は作ろうとして作れるものではなく、右脳の直感的な感性のままにキャンバスに向かうことも大切であろう。しかし、構成的な部分については左脳の論理的な思考が不可欠であり、芸術性の右脳と論理性の左脳が総合的に協調してはじめて作品ができ上がると考えられる。構成的な絵を目指しているが、情感や高揚感、心の部分も大切にしたいと思っているので、左右の脳が密接に連携し一体となって働いてくれる事を願っている。



山本 秀樹 [愛知県]

[放の句を描く]

5年ほど前から小豆島出身の知人の誘いで、自由律俳人尾崎放哉の作句をモチーフ(動機)にした絵画展『尾崎放哉との対峙展』に参加している。この絵は放哉が土庄町の南郷庵に入庵していた時代に読んだ一句、「ここから波音きこえぬほどの海の青さの」から受けた清涼感のある映像的な印象に触発されて描いたものである。

放哉の句には端的で明快な表現があり、絵画的な表現と繋がる魅力がある。この絵は放哉のそんな感性を受け止めたものである。